アザラシの島と少年の冒険

佐賀　彩美（さが　あやみ）
アイヌ語地名研究会

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モントレー国際大学院（現ミドルベリー国際大学院モントレー校）通訳翻訳学科修士課程修了。北海道大学大学院農学院農学専攻博士後期課程修了。全国通訳案内士。

北海道ではアザラシのことをトツカリとも呼びますが、これはアイヌ語のトゥカルまたはトゥカラからきています。アイヌの人々にとって夏も冬も捕獲することができたアザラシは重要なタンパク源であり、その毛皮も、衣服や履物などさまざまな生活用品を作るために重用されていました。北海道周辺に生息しているのはゴマフアザラシ、フイリ（またはワモン）アザラシ、クラカケアザラシ、ゼニガタアザラシの４種類ですが、最も一般的にみられるのは体にゴマを散らしたような斑点があるゴマフアザラシです。若いアザラシは毛が柔らかく加工しやすいのですが、肉はあまり美味（おい）しいとは言えず、年齢が上がるにつれて肉の味もよくなるのだそうです。１頭のアザラシからは相当量の肉が取れますから、アザラシを捕獲するとその肉は村中の家々に分配されました。

この少年の話は、ポーランド出身で樺太（からふと）に流刑になった際、アイヌやウィルタなどについて研究したブロニスワフ・ピウスツキが収録したアザラシ猟にまつわる伝承のうち、英雄譚（たん）と呼ばれるものの一つです。あるアイヌの少年は、不猟を嘆く祖父からアザラシがたくさんいる島があると聞いて、祖父が寝ている間に、アザラシを捕まえようと島に向けて出かけて行きました。この島は現在サハリン東海岸沖合にあり、アザラシの大生息地である海豹島（かいひょうとう）が想定されるとのことです。実はその島には悪神が住んでいたのですが、祖父の古い友人であるというヤイレスポ（yay－自分自身で resu－育てる po－子ども）という超人的な能力を持っている男が、少年が悪神に見つかる前に逃がしてくれました。北海道ではサマイクルですが、ヤイレスポは樺太東岸での呼称で、半分人間、半分神様のような存在と言います。話のなかでヤイレスポが言うには、少年が海路を半分の距離まで戻ったところ、すなわちアイヌ語では、ハンケアトゥイ（hanke－近い atuy－海）、トゥイマアトゥイ（tuyma－遠い atuy－海)、ウコウトゥルケタ（uko－お互い untur－の間 ke－の部分 ta－に）、エオマンチキ（e－お前が oman－行った ciki－なら）と言い、後ろから神同志が戦う音が聞こえてくるはずである。そのとき、弱い雨が降ってくるがそれは、ヤイレスポが傷を負ったしるしであり、さらに家に近くなったときに激しい雨が降ったならば、ヤイレスポが悪神に勝ったことを示すのだとのことでした。

人でも神でも、力比べをすることはウヌプルパクテ（u－互いに nupur－力 pakte－を比べる）です。そして、アイヌ社会の考え方では、正しいほうが勝つことになっています。それは、多くの神々が味方するからです。負けるのは何か問題があるからだということです。勝ちはエイカウン（e－それで i－そ ka－の上 un－にある)、負けはエイポクン（e－それで i－それ pok－の下 un－にある）と表現されます。現在世界は紛争だらけですが、この法則を当てはめるとどういうことになりますでしょうか。

ヤイレスポに助けられた少年は、帰途、祖父が少年の無事を祈る言葉が虹のように流れてくるのを感じます。アイヌの人々は、何かを真剣に願う祈りの声は天高く登り、虹になって反対側に届くのだと考えていました。虹の上では、神々同士が願いを聞き届けようかどうしようかなどと意見を交換しているのだそうです。虹が出たら、そんなふうに想像してみるのも素敵ではないでしょうか。

＊本稿は、元北日本文化研究所代表であった藤村久和先生を講師として（一社）北海道開発技術センターが自主事業として実施してきたアイヌ文化勉強会の内容を、筆者が取りまとめたものを、藤村先生に長年師事されていた花輪陽平氏に校閲いただいたものです。

藤村　久和　氏　（1940-2025）　元北海学園大学名誉教授　北日本文化研究所代表　アイヌ語地名研究会会長
アイヌ学全般（精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療(整体ほか)等）を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び・実践してきた。主な著書：『アイヌの霊の世界』（小学館、1982年）、『アイヌ、神々と生きる人々』（福武書店、1985年）、『アイヌ学の夜明け』（梅原猛氏との共編、小学館、1990年）、『アイヌのごはん』（監修、デーリィマン社、2019年）、『平成20～令和６年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査１～16』（北海道教育委員会、2008～2025年）等。